牧原浩先生と市原鶴岡病院にて

野村直樹
［名古屋市立大学名誉教授］

「日本の精神病院で長期のフィールドワークなんて，どだい無理だったんだ」ぼくは暗い気分になっていた。紹介状を持参してアメリカからやって来たものの，「君がいると病棟が不穏になるから」と言われてある精神病院を後にした。別れ際に院長が「君の言っていることに関心持つかもしれない人を一人知っている。よかったら紹介する」と言ってくれた。紹介してもいいという人の名は，牧原浩と言った。

稲穂が色づいたあぜ道は夏と秋が入り交じった表情だ。ぼくが歩く目の前を無数のイナゴが飛び跳ねる。1983年の夏の終わり，JR五井から小湊線というローカル線に乗って，上総三又という駅で降りた。単調なアスファルトを避けて田んぼ道を選ぶ。ずんずん行くと一面の稲穂と晴れた空の向こうに白く低い鉄筋のビルが見えた。緑の太字で十字のサインがある。

牧原先生はあたかも待っていたかのようにぼくを迎えた。この出会いからちょうど1年後，1984年夏から1985年夏まで，まる1年間，ぼくは市原鶴岡病院で人類学のフィールドワークを行った。毎日のように牧原さんと過ごし，ベイトソンの理論を語り，ファミリーセラピーに参加した。ぼくは牧原さんから調査上での最大限の自由をもらったような気がする。ナースステーションで「録音を取りたい」と言ったら許してくれ，「入院したい」と言ったら入院させてくれた。ぼくは保護室に入り，閉鎖と開放の両病棟で3週間過ごした。ぼくは牧原さんから時に「研究者」として，時に「同僚」として，そして時に「患者」として扱ってもらった。また，スタッフの調査への協力は一級のものがあったので，ぼくは容易にスタッフの中にとけ込むことができた。1年間のフィールドワークを無事終えることができたのも，牧原さんの院長としての自然体と人懐っこい人柄のせいだっただろう。

牧原さんが調査に与えてくれた自由度がなかったら絶対に書けなかった論文がある。先の録音許可は時としてナースステーションに出入りする患者の声をキャッチした。ある男性患者が自死する前に偶然にもテープに残したスタッフとのやりとり。数カ所に断片的に点在する聞き取りにくい声から，ぼくはその患者と看護者の世界を再現してみようと考えた。「彼はなぜ死を選んだのだろう？」患者とスタッフとの短いやりとりを何百回と繰り返し聴いた。すると，そこに居合わせたぼく自身，スタッフひとり一人の個性，前後の状況を自分が体験して知っていることなど，全部が合わさって起きたことの全体が見えてきた。

体験入院の経験なしでは，客観的なデータも進んで解釈，理解することは困難だった。牧原さんは自身が研究者だったからか，なによりぼくのしていることを身近でよく理解したのだろう。「患者－看護者のコミュニケーションにおける悪循環の構造」[1]は，牧原さんの寛容，スタッフの協力，声を残してくれた当事者，どれ一つ欠けても書くことはできなかった。この論文は，決して当時の院長だった牧原さんを賛美したものではない。むしろ逆の意味さえ伝えるものだった。しかし，同時にこの論文は牧原さんの最後のコメントをつけずに終わることもできなかった。その「院長からのコメント」という箇所で，牧原さんはこう書いている。

> ここに書かれている事件は，精神科の病院でしばしば起るようなことの1つに過ぎないと言ってしまえばそれまでだが，そのように見過ごすことはできないということをこの論文は教えている。（中略）当時院長として働いていた私にとって，かなりつらい問題だったことが想起される。院長として，各職員がうちひしがれてはいけない，働く意欲が奪われてはいけない，さりとて日常的な問題として軽視されてもいけない，職員の前で私がどんな態度をとることが適切か，といったことが私の頭の中をかけめ

ぐっていたように思える。（中略）今あらためて，当時苦楽を共にした仲間がなつかしいという感慨が起るのを禁じえなかった。それぞれの人生を歩みつつ（その各自の人生の歩み方の様相が，この論文から伝わってくる），まとまった集団として機能してゆくことの困難さとともに，その重要性もまた示唆されたように感じ，今私はこの職場を離れているが同様なことがこれからも起るに違いないし，その際の大きな道標に，この論文はなるように思われる。

牧原さんらしい筆の運びである。この論文が書けたことをぼくはうれしく思っているが，病院には何の役にも立たない人類学者を，好奇心と温かさで，1年間放し飼いにしてもらった恩を忘れることはできない。牧原先生，ありがとうございました。

文　献

1）野村直樹，宮本真己：患者－看護者のコミュニケーションにおける悪循環の構造：ある精神科閉鎖病棟での患者の死をめぐって．看護研究，28（2）1995.